講演会 特別寄稿

アル＝フスタートと早稲田大学の調査

近　藤　二　郎
早稲田大学文学学術院教授

今回、「世界をつなぐやきもの展」で陶磁器が展示されているアル=フスタート遺跡と1978（昭和53）年10月に開始した早稲田大学によるアル=フスタート遺跡の発掘調査の頃の話を紹介したいと思います。

１．エジプト最初のイスラーム都市アル=フスタート

エジプトの首都カイロ市南郊に位置するアル=フスタート遺跡は、エジプト最初のイスラーム都市址として有名なものです。640年の初頭に、イェルサレムからアムル・ビン・アル＝アース将軍に率いられた3,500人のエジプト遠征軍は、ペルシウムからエジプトに侵入し、９月にはビザンツ（東ローマ）帝国の軍事拠点のバビロン城の包囲を開始しました。そして、翌年の641年４月になると、バビロン城は開城され、そして、６月に、アムル将軍は、アレクサンドリアに向けて軍を率いて進軍していきました。11月に講和条約を締結したアムル将軍は、アレクサンドリアを首都とすることに決め、カリフ・ウマルに、その許可を求めたが、却下され、カリフは、アムルにバビロンの地を都とすることを定めるように命じたのでした。

ビザンツ軍の拠点が置かれたバビロン城の名前は、古代バビロニアの都バビロンの名と同じですが、このバビロンの名をアラビアの歴史家たちは「バーブ・リ・オン（bab-li-On）：オン（ヘリオポリス）への門（入口）」に由来するとしていましたが、古代エジプト語研究の大家であるA・H・ガーディナー（A. H. Gardiner）は、この「バビロン」の原義を古代エジプト語の「ペル・ハピ・エヌ・イウヌウ（*pr H^{c}py n Iwnw*：ヘリオポリスのハピ神の家）」にあると推定しています。古代エジプトのハピ神は、ナイル川の神であり、バビロン城に近いローダ島の南端には、古代から近代に至るまで、ナイル川の水位を測定するナイロ・メーターが設置されていたこととも関連があると考えられます。

バビロン城と対峙する城の北側にアル=フスタートは、位置しており、この場所に、アムル将軍は本陣となるテントを設営しました。アレクサンドリアへと進軍する際に、アムル将軍は、テントをたたむように命じたのですが、このテントの中に鳩が巣をつくり、卵を抱いていたことから、そのままにするよう残留軍に命じたのでした。そして、アレクサンドリアの講和後、アムル将軍は、バビロン城に戻り、カリフに命じられた首都をどこに建設するかを思案していました。その時に将軍の兵士たちが、「アムル将軍のテント」（フスタート）」とその場所を進言したことから、この場所に、エジプトにおける最初のイスラームの都市が築かれたのでした。

２．アル=フスタート遺跡調査に至るまで

早稲田大学エジプト学研究所は、現在、エジプト・各地で調査・研究を実施しております。早稲田大学によるエジプトでの調査・研究の歴史は、1966-67年にまでさかのぼります。当時、早稲田大学第一文学部の学生であった吉村作治氏（現・早稲田大学名誉教授・東日本国際大学学長）を学生リーダーとする５人の学生と川村喜一文学部講師（後の教授、1978年12月19日逝去、享年48歳）は、トヨタ自動車から四輪駆動車のランドクルーザーの提供を受け、北は地中海岸のアレクサンドリアから、南は当時、解体・移築中であったアブ・シンベルに至るエジプト全土の遺跡の踏査

（ジェネラル・サーベイ）を実施したことに始まります。その後、エジプトにおける考古学的発掘調査を実施するため、発掘許可を得るための交渉が続けられ、ついに1971年12月からエジプト南部の有名な観光地であったルクソール市の対岸（西岸）に位置するマルカタ南遺跡で、日本人として初めての発掘調査が開始されることになります。このマルカタ南遺跡は、ツタンカーメン王の祖父にあたる新王国第18王朝アメンヘテプ３世が造営したマルカタ王宮の南に位置し、ローマ帝国のトラヤヌス帝（在位：98-117年）やハドリアヌス帝（在位：117-138年）などの名前の残るイシス神殿（ディール・アル=シャルウィート）が存在する遺跡で、神殿本体の調査権は、フランスの東方考古学研究所（IFAO）が持っていたため、早稲田大学の発掘調査はイシス神殿の周囲に位置する紀元後２世起を中心とするローマ時代の住居跡に集中するものでありました。ローマ時代の住居の下部からは先王朝時代末期や後期旧石器時代の遺物も発見されていましたが、第３次調査（1973-74年）時にイシス神殿北方の「魚の丘」でアメンヘテプ３世が造営した彩色階段をともなう日乾煉瓦造の建物址が発見され、世界的にも大きな話題となりました。

その結果、多くの方々の援助を受け1976年12月にルクソール西岸に「ワセダ・ハウス」が建設されました。ドームとアーチを持つイスラーム建築の特徴を取り入れたこの建物は、当時、カイロ大学に留学中の私の先輩である川床睦夫さんの設計・施工によるものでした。川床さんは、工事現場に滞在しながら完成させたもので、今でも早稲田大学エジプト学研究所のルクソール地域における調査の拠点となっています。

川床睦夫さんは、残念ながら昨年（2018年）１月21日に逝去されてしまわれましたが、日本でも数少ないイスラーム考古学を専門とする研究者でした。私自身も今から43年前の1976年11月にマルカタ南第６次調査に参加した時に初めてお会いしました。ワセダ・ハウスの完成を現地で祝ったことは今も忘れられません。それから２年後の1978年に川床さんの夢であるアル=フスタートの発掘調査が開始されることになります。エジプトで最古で最も重要なイスラーム都市の発掘をすることになります。この同じ年（1978年）の３月末にエジプト調査の隊長をされていた川村喜一先生が倒れ、阿佐ヶ谷の河北病院に入院することになります。10月に入り、アル=フスタート遺跡の第１次の発掘調査に参加するため、カイロに出発する前に川村先生に会いに行くと、先生は、私の手を握って、「川床さんとは、喧嘩せずに仲良くするんだよ。頑張ってきてください。」と言って下さいました。この時が川村先生にお会いした最後となってしまいました。川村先生は、その年の12月19日に僅か48歳という若さで帰らぬ人となってしまわれました。川村先生が、私と川床さんとの仲を心配されていたのは、２年前のマルカタ南遺跡の第６次調査に参加した際に、私が生意気であったことから、私と川床さんとの間が上手くいっていないと川村先生が感じられていたからであると思います。

３．アル=フスタート遺跡の第１次調査

10月前半に私は大量の発掘機材などを持ってカイロに飛び立ちます。カイロ空港に到着すると、川床さんが待っていてくれて、そのままタクシーに乗せられて空港からアル=フスタートの発掘現場に連れて行かれ、すぐに調査に参加することになりました。調査は、最初は川床さんと私だけの２人でおこなっていました。早朝に宿舎を出発して現場で発掘を始めます。第１次の調査であったため、川床さんは、毎日のようにエジプトの考古庁（現・考古省）や警察などに交渉にでかけており、私がエジプト人作業員100人ほどと遺跡に残されます。私が指示を出して発掘するのですが、発掘しているとすぐにポイントを入れなければならない遺物が大量に出土し、遺跡は、串がたくさん刺さった形になります。それを私が平板でエジプト人の少年を助手として使いながらポイントを入れて取り上げていきます。こうしてポイントを入れた遺物は、毎日、膨大な数にのぼり、多いときには数百点に及んでいたと思います。それらの遺物を宿舎に持ち帰り、遺物台帳を深夜まで２人で作成し、また早朝に出発する毎日でした。２人とも若かったので、こんなに無茶な

調査が出来たものと思います。

アル=フスタート遺跡が位置するオールド・カイロの場所は、土器を焼成するための窯が並んでおり、燃料として使用されたサトウキビの絞りかすが、甘酸っぱい香りを放って鼻につきます。また廃墟となった広大な遺跡の北にはカイロ市のゴミ焼却場もあり、風が吹くと煙や埃が調査地に流れ込み、髪の毛には汚れと埃がこびりついてしまい、宿舎に戻ってシャワーを浴びると信じられないほどの黒い水が流れ出します。また、遺跡周辺の住民の多くは不法居住者たちであり、私たちが警察に守られながら調査していることに対して、反感を高めていて、発掘調査に対して多くの妨害を受けました。発掘された遺構や標高を示すＢＭ（ベンチ･マーク）が壊されたり、発掘現場に朝行くと、ロバの死体が投げ込まれていたりしました。そのため、発掘頭のライス･ハムザは、常にピストルを携行していました。

また、ある日、発掘現場にエジプト人がやってきて、発掘されたランプや遺物を眺め、「幾らなら売ってくれる？」と聞いてきました。私たちは隣にエジプト考古庁の査察官（インスペクター）がいたので、どうなるかと興味をもって眺めていると、この男（骨董商）は、役人がいることに気づいて言葉を濁して立ち去っていきました。こうしたアル=フスタート遺跡での様々な経験が、私のエジプトでの調査に今でも役に立っていると感じています。

第１次調査は、大変でしたが広大な地域を発掘しました。アル=フスタート遺跡は、主として、１期：642-750年（正統カリフ時代・ウマイヤ朝時代）、２期：751-969年（アッバース朝）、３期：969-1168年（ファーティマ朝の樹立から十字軍侵攻まで：大いに繁栄した。）、４期：1168-1349年、アイユーブ朝とマムルーク朝前期を含む５期：1349～に分けられます。1340年代のナイル川の異常増水、1347年頃から盛んに流行した「黒死病」の流行により、人口は１／３に急激に減少してしまったと言われています。また、アル=フスタートは、1168年にイェルサレム王国のエジプト侵攻の際に、自ら火を放って破壊されたとされていましたが、早稲田大学の調査隊の発掘調査では焦土層は検出されず、都市全体が火に包まれたものではなかったと推定されました。

第１次調査では、イスラーム陶器片、中国陶磁器片、ランプ、コイン、日用道具など多数の貴重な遺物を発見することができました。排水穴からは、ほぼ完形の美しいカット装飾のあるガラス瓶が発見され、この９月から、早稲田大学の大隈記念タワー（26号館）10階125記念室で常設展示をしていますので是非、ご覧下さい。

第１次調査で発見されたガラス瓶

第１次調査時（1978年）の記念写真：前列向かって右より、櫻井清彦 先生、三上次男 先生、吉村作治 先生、後列右から吉田章一郎 先生、川床睦夫さん、ライス・ハムザ、私、考古庁インスペクター

４．三上次男先生との出会い

第１次調査の時に、アル＝フスタートの発掘現場には、多くの先生方が日本から訪ねてこられました。櫻井清彦先生、吉村作治先生をはじめ三上次男先生、吉田章一郎先生、佐々木達夫先生などです。中でも、三上先生には、アル＝フスタート遺跡で中国陶磁器だけではなく、数多くのお話を伺うことが出来ました。

今でも印象に残っていることは、私が先生に「どのようにしたら陶磁器を見極めることが出来ますか？」というような質問をしたことがあるのですが、先生は嫌な顔一つすることなく丁寧に話しかけて下さいました。「とにかく、良品から見ていくことだよ。最初から発掘で出てくるようなものばかり見ていてはダメだよ。まず国宝とか、重要文化財とか指定されている良品から見ていくことで、どんなものが良いのかが何となくわかってくると思う。その後、たくさん見ているうちに、これは良いけれど、これは少し…などと思うようになってきたときに自分自身の基準ができてくると思う」と教えられました。アル=フスタート遺跡出土の中国陶磁器は、極めて量が多く、毎日のように分類していくことで自然とそれらが焼成された窯や時代を理解していったようです。そうした時期に三上先生とお話しできたことは大変幸せなことでした。

この言葉は、陶磁器に限らず、あらゆる美術作品の鑑賞の仕方にも共通するものであると思います。まず、他人が良いと言っているもの、あるいは賞などをもらった作品などをたくさん見ていくうちに自分自身の中で、基準ができてくることで審美眼が育つのだと教えられた気が致します。

参考文献

櫻井清彦・川床睦夫（編）
『エジプト・イスラーム都市　アル＝フスタート遺跡
―発掘調査―1978-1985年』、早稲田大学出版部
1992年３月